

公益財団法人

日韓文化交流基金 NEWS

The Japan-Korea Cultural Foundation

2013.9.29 NO. 67

Contents

- 1-3 JENESYS2.0 及び北米地域との青少年交流スタート
- 4 日韓文化交流基金講演会の足跡
～日韓関係の今から韓流ブームまで、多様なテーマで送る～
- 5 「日韓交流ユースカップ2013」及び
「韓国との間の招へい・派遣事業」
- 6-7 フェロー研究紹介
古代東アジア諸国の唐に対するまなざし
- 新羅・渤海の対藩鎮交渉 -
ソウル大学校人文大学国史学科 小宮秀陵
- 8 助成事業紹介 大阪に盛り上がるアヒラン
日本民謡梅若会 会主 梅若梅朝
- 9 交流エッセイ 石の上にも
通訳コーディネーター 牛尾恵子
- 10 日韓文化交流基金事業報告
(2013年4月～6月)
- 11 業務執行理事 兼 事務局長就任の御挨拶
余田幸夫
- 12 公募プログラム フェローシップ・助成のご案内

JENESYS2.0 及び北米地域との青少年交流スタート

外務省の「JENESYS2.0 及び北米地域との青少年交流」の一環である、青少年の招聘・派遣事業がスタートしました。「JENESYS2.0 及び北米地域との青少年交流」(以下「JENESYS2.0」)は、2007年から5年間にわたり実施された「21世紀東アジア青少年大交流計画/JENESYS Programme」の後継として、アジア大洋州及び北米地域を対象に、3万人規模の青少年交流事業を行うものです。当基金は韓国との間の招へい・派遣事業を行います。

当基金の招へい・派遣事業においては、中高生、大学生を主な対象者とし、10日間前後の研修を行います。

招へい事業は、次のような内容で構成されます。

- 人的交流(学校訪問やホームステイを通じた、実生活の体験)
 - 企業訪問(業務内容や製品について学び、日本の産業についての理解を深めてもらう)
 - 地方滞在(都市部では味わえない、地方ならではの豊かな自然や文化に接し、その魅力を発見してもらう)
 - 文化体験(工芸品の製作や和菓子作り、和太鼓演奏など、五感に訴えるプログラムを通じ、文化を体感してもらう)
- この他にも、歴史的建築物や世界遺産の見学、最先端技術について学べる施設訪問、季節に合わせた見学・体験プログラムも

盛り込まれています。

これらを通じて、韓国の青少年にありのままの日本を見てもらい、文化、歴史、生活を直接体験することで、対日理解を深めてもらいます。

派遣事業も招へい事業同様、企業訪問や文化体験、人的交流などを通じ、韓国の伝統文化や社会に接することで韓国への理解を深めると同時に、一部の訪問先では日本の魅力を紹介する発表を行うことも予定しています。

また「JENESYS2.0」では、帰国後の情報発信を重要視しています。団員達に相手国で経験したこと、そして相手国の魅力を帰国後、家族や友人と広く共有してもらい、相互交流が一層活性化することを期待するものです。



【韓国大学生訪日研修団】日本の学生とディスカッション



【韓国高校生訪日研修団】学校で給食体験



【韓国中学生訪日研修団】文化体験

公益財団法人日韓文化交流基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号 虎ノ門ワイコービル4F
Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

<http://www.jkcf.or.jp>

当基金が「JENESEYS2.0」で行っている現在の青少年交流事業は、昨今の日韓政治環境の影響を受けることなく、円満に推進されています。私ども職員が青少年交流の重要性を再認識し、やりがいを感じる、訪日研修団の参加者の感想等を日程とともにご紹介します。

在韓公館選抜事業 韓国大学生訪日団 平成25年3月28日(木)～4月6日(土)

3月28日(木)

成田国際空港着



3月29日(金)

観光庁職員によるブリーフ
(長野県長野市へ移動)

長野市長表敬
長野市の魅力に関するブリーフ

3月30日(土)

長野市松代町で大門踊り体験

真田邸と宝物館見学

善光寺見学

鬼無里でホームステイ対面式



3月31日(日)

ホストとの文化体験

(おやき作り、おぶっこ作り、餅つき、鬼女紅葉太鼓体験)

ホームステイ



4月1日(月)

マルコメ株式会社本社訪問

アパレル企業訪問(都内)

4月2日(火)

和菓子作り体験
グリー株式会社訪問
東京タワー見学



4月3日(水)

日本人大学生との交流会
(Cool Japan探し・まとめ)



4月4日(木)

日本人大学生との交流会
(活動内容の発表、ディスカッション)



4月5日(金)

着付け・茶道体験
外務省訪問(鈴木俊一副大臣表敬)
日本科学未来館見学
訪日研修報告会

4月6日(土)

成田空港より出国

参加者の感想

○ホームステイに関して

- ・田舎生活が体験でき、東京見学のときとは違った見方で日本が見られるようになった。
- ・家族同様に接してくれたのに感動した。
- ・家具を手作りしたり手芸したりして、質素ながら幸せに暮らしている様子が印象的だった。
- ・ホームステイで親切にそして温かくしてもらい、研修後には日本のイメージがよくなった。また、日本人は小食と聞いていたが、本当にお腹がはち切れるほどすすめられ、嬉しかった。
- ・ホームステイ前は年齢も離れているし、世代的に韓国に反感を持っていたらどうしようと心配したが杞憂だった。最後は涙が出るほど情が移った。

○日本人大学生との交流に関して

- ・日本の大学生との交流を通じ、日本の友人ができたことは大きな収穫だった。一緒に街を歩いて日本らしいモノ(COOL JAPAN)を探すプロジェクトはとてもためになったし、日本人特有の気遣いを肌で感じられた。
- ・ディスカッションでは国家という枠を離れ、個人的意見がたくさ

ん聞けてとても有意義だった。

- ・「国家同士の関係は別とし、我々が人間同士アジアのために一緒に協力していかなければならない仲間だということを感じておきさえすれば、どんな問題も些細なことだ」というある日本の学生の言葉に感銘を受けた。国家間の問題をどうしていくか、整理がついた気がした。

○伝統、文化に関して

- ・体験することが難しい伝統文化を肌で感じられたのがよかった(大門踊り、鬼女紅葉太鼓、和菓子づくり体験、着物、茶道)。
- ・長野市訪問を通じて、日本という国は各地域がそれぞれ特徴を持っており、それを生かしていると思った。地方の文化財を重視し、大切にしている点は、韓国が見習わなくてはならないと思った。
- ・COOL JAPAN探しの際に、他国から入ってきた文化を自らのものとして吸収する日本の力を知った。
- ・料理がどれも美味しかった。日本の料理はまた食べたくなる物ばかりだった。一行は30人ほどだったが、全員を満足させる料理はなかなか提供できないだろうが、それができていた。誰も不満を口にすることはなく、感動した。

○自国の人に伝えたいこと

- ・日本人たちの食文化・風呂文化・礼儀などを知り、韓国に帰ってからは日本人の親切なサービス精神を伝えたいと思う。
- ・帰国して授業発表があるので、そこで祭りについて、長野の踊

りの映像資料を見せようと思っている。

- ・就職活動とぶつかったが、思い切って研修を優先してよかったと伝えたい。

在韓公館選抜事業 韓国高校生訪日団 平成25年4月10日(水)～4月16日(火)

4月10日(水)

成田国際空港着



4月11日(木)

観光庁職員によるブリーフ

都内視察（原宿神宮前商店会による案内）



4月12日(金)

株式会社ディー・エヌ・エー

(DeNA)訪問

(群馬県高崎市に移動)

少林寺達磨寺の視察

高崎だるま絵付け体験



4月13日(土)

伊香保温泉街視察

伊香保おもちゃと

人形自動車博物館見学

みなかみ町・たくみの里視察

みなかみ町でホームステイ対面式



4月14日(日)

ホームステイ先より集合

(都内に移動)



4月15日(月)

郁文館高等学校訪問

外務省訪問

感想報告会



4月16日(火)

成田空港より出国

参加者の感想

○ホームステイに関して

- ・農家ホームステイが一番印象的。実際行く前は、年齢のギャップもあり、話題に詰まらないか心配だったが、行ってみたらホストが本当にしっかり準備してくれて心配は吹き飛んだ。自分の準備不足が申し訳ないほどだった。
- ・ホームステイでは、農村の振興のために日本全体が努力している姿が見られてよかった。
- ・こたつでホストファミリーと団らんし日韓お互いのことについて語り明かした。
- ・念願の畳体験(ができた)。
- ・農村のありのままの暮らし(早起きして草取りして、ウサギや鶏の世話など)(ができた)。
- ・自家製の野菜、卵などでのもてなしも素晴らしく、たくさんおかわりした。

○企業訪問・学校訪問に関して

- ・企業訪問では思った以上に韓国と交流がある企業が多いのだなあと感じた。

○伝統、文化、自然に関して

- ・群馬県のたくみの里を訪れた際に、日本の伝統的建物の外観ときれいに整えられた風景の調和が強烈に印象的だった(水が流れているのが特によかった)。

- ・職人のお店で日本文化を感じられてよかった。
- ・ダルマ作りで職人の話が聞け、職人魂に触れられ、貴重な経験になった。
- ・原宿で個性ある独特の文化に触れられた。互いに個性を認め合っている姿が印象的。
- ・「群馬ちゃん」のように地域を代表するキャラクターがあるということが印象的。グッズを買いたくなった。
- ・食べ物がすべて清潔で新鮮、安心できる、という印象を受けた。これも日本の大きな長所の一つだと思う。
- ・伝統と現代的なものが混在する部分に感銘を受けた。

○自国の人に伝えたいこと

- ・学校訪問で、日本の学生たちが夢に向かって、目標を実現するために学校に通っているのを目の当たりにし、韓国は見習わなければならないと思った。自発的にクラブ活動をしながらやりたいことを探し、余暇を楽しんでいる。壁に貼ってあった将来の夢の発表を見て「こんな学校ならば通いたい」と思った。
- ・ホームステイでは本当の孫のように接してもらい、日本人は温かいと感じた。この思いを胸に韓国に帰ったらまず、日本人は親切だということをもみんなに伝えたい。
- ・韓国の友人の中には日本によくない印象を持っている人も多いが、そういう人に先入観を捨てるように話し、本当の日本の素晴らしさを伝えたい。

日韓文化交流基金講演会の足跡

～日韓関係の今から韓流ブームまで、多様なテーマで送る～

日韓文化交流基金では韓国・朝鮮研究の専門家を講師に招いて、専門分野や日韓関係を主題とした講演会を開催しています。この講演会は賛助会員の方をはじめ、当基金の活動や日韓交流に関心のある方々と、当基金との交流の機会を設けるという役割を担っています。

平成18年7月に開催された第1回では賛助会員(当時は維持会員)を対象に、小此木政夫慶應義塾大学教授(当時)を講師に招き、「最近の日韓関係―課題と展望」と題するお話をうかがいました。この前年に竹島の日が制定されたことや靖国参拝問題等で、当時の日韓関係は信頼が崩壊した状態だったにもかかわらず、市民レベルの交流は大きな影響を受けていないというお話に、当基金の交流事業担当者も大変勇気づけられました。

翌19年1月の第2回からは会員のみならず、広く一般の方を募って開催されることになりました。この回では韓国語研究者として名高い梅田博之麗澤大学学長(当時)から言葉の学習を通じた日韓間の交流に関するお話をうかがいました。韓流ブームも手伝って韓国語学習者が飛躍的に増えたことあり、参加者の方々は皆熱心に講師のお話に聞き入っていました。

【これまでに開催された講演会】

	日時	テーマ	講師 *職位は当時のもの
第1回	平成18年7月13日(木)	「最近の日韓関係―課題と展望」	小此木政夫(慶應義塾大学教授)
第2回	平成19年1月10日(水)	「言葉の学習を通じた日韓の交流」	梅田博之(麗澤大学学長)
第3回	平成19年9月28日(金)	「朝鮮医薬と徳川吉宗」	田代和生(慶應義塾大学大学院教授)
第4回	平成20年9月10日(水)	「『ポスト韓流』の日韓文化交流」	小倉紀蔵(京都大学大学院教授)
第5回	平成21年5月21日(木)	「フィールドワークで見た韓国、日本、沖縄」	伊藤亞人(早稲田大学アジア研究機構教授)
第6回	平成22年9月24日(金)	「ハングルの誕生―音から文字を創る―」	野間秀樹(前東京外国語大学大学院教授)
第7回	平成22年11月5日(金)	「釜山ビエンナーレ2010 living in Evolution」	東谷隆司(現代美術キュレーター)
第8回	平成22年12月3日(金)	「李光洙(イ・グァンス)の生涯と作品」	波田野節子(新潟県立大学教授)
第9回	平成24年3月1日(金)	「韓国時代劇を楽しむ―ドラマに描かれた歴史の世界」	康熙奉(株式会社一石堂代表)
第10回	平成24年6月15日(金)	「韓流小説を読む」	川村湊(法政大学教授)
第11回	平成24年12月14日(金)	「韓(から)くにを旅して43年―その軌跡」	藤本巧(写真家)

20年9月の「『ポスト韓流』の日韓文化交流」は講師の人気と興味深いテーマによって、初めて募集人数を超えるご応募を頂きました。韓流を支える多様な世代の参加によって、当基金と講演会の存在を幅広くお知らせする機会となりました。

22年度は「日韓文化交流の<昨日・今日・明日>」と題するシリーズ講演会を企画、「ハングルの誕生」「釜山ビエンナーレ2010」「李光洙の生涯と作品」の3回が開催されました。なかでも「釜山ビエンナーレ2010」ではこれまで日韓交流の場とは接点の少なかった美術関係者に多数ご参加頂けたことで、また一歩交流の輪が広がったように思います。

24年度には学術的なテーマから少し離れ、ドラマや写真など、ご要望の多かった講演会を企画、いずれもたくさんの方にお越し頂くことができました。

今年度は新たなテーマ企画として「韓国源流シリーズ」(全3回)を掲げています。今後もより多くの方々に講演会を楽しんで頂くため、さまざまなテーマを扱っていきたいと思います。どうぞご期待ください。



康熙奉講師の熱のこもった講演風景



梅田博之講師を囲んで



講演後、懇談する参加者の方々

■平成25年度講演会のご案内「韓国源流シリーズ」(予定)

- 第1回 10月「韓国映画の源流」講師：四方田犬彦(映画論・比較文化研究家)
- 第2回 12月「韓国流行文学の源流」講師：和田とも美(富山大学人文学部准教授)
- 第3回 平成26年3月「K-POPの源流」講師：田月仙(声楽家)

※詳細は順次HP上に掲載。

「日韓交流ユースカップ 2013」及び 「韓国との間の招へい・派遣事業」

「日韓交流ユースカップ2013」の実施

7月24日(水)から8月9日(金)まで、「JENESYS2.0」の一環として、日韓交流ユースカップ2013を実施しました。

この事業は、日韓の高校同士で日韓混成チームを結成した8つのチームが参加し、お互いの国を訪問しながら、サッカーを通じた交流を行うものです。相手国の社会や文化に接しながら交流し、相互理解とお互いの魅力を発見することを目的としています。実際の交流の様子など、事業の詳細は次号でご紹介します。

■参加チーム(8チーム、表記は日本側・韓国側<派遣日程、招へい日程の順>)

- (1) 東北学院高等学校・^{クムホ}錦湖高等学校 <7/25(木)～29(月)、8/3(土)～9(金)>
- (2) 栃木県立宇都宮白楊高等学校・^{スンシル}崇実高等学校 <7/24(水)～29(月)、8/3(土)～9(金)>
- (3) 國學院大學栃木高等学校・^{サンムン}尚文高等学校 <7/24(水)～29(月)、8/3(土)～9(金)>
- (4) 矢板中央高等学校・^{コヤン}高陽高等学校 <7/25(木)～30(火)、8/3(土)～9(金)>
- (5) 鹿島学園高等学校・^{クリ}九里高等学校 <7/25(木)～30(火)、8/3(土)～9(金)>
- (6) 習志野市立習志野高等学校・^{インチョン}仁川南高等学校 <7/25(木)～30(火)、8/3(土)～9(金)>
- (7) 東京学館高等学校・^{フビョン}富平高等学校 <7/24(水)～29(月)、8/3(土)～9(金)>
- (8) 山梨県立甲府東高等学校・^{チュンジュ}忠州商業高等学校 <7/24(水)～30(火)、8/2(金)～9(金)>



2012年、サッカー大会



2011年、招へい事業(横浜市立桜丘高校での書道体験)

「韓国との間の招へい・派遣事業」実施団体公募結果

「JENESYS2.0」の趣旨に沿った形でテーマを設定して招へい・派遣事業を行う団体を公募した結果、申請のあった20団体のうち、次の8団体を選定しました。

	事業名	実施団体	区分
1	第20回日韓高校生交流キャンプ	一般社団法人日韓経済協会	招へいのみ
2	九州大学生の派遣、韓国・釜山大学生の招へい	国立大学法人九州大学韓国研究センター	招へい・派遣
3	韓国高校生訪日団	一般財団法人日本国際協力センター	招へいのみ
4	韓国青少年グループ招聘研修団	公益財団法人大阪国際交流センター	招へいのみ
5	大学生訪日研修団	NPO法人日中韓から世界へ	招へいのみ
6	日韓誠信学生通信使2013	早稲田大学アジア研究機構	招へいのみ
7	水原市大学生研修団	静岡市国際交流協会	招へいのみ
8	韓国代表大学生研修団・北海道代表大学生研修団	北海道総合政策部知事室国際課	招へい・派遣

古代東アジア諸国の唐に対するまなざし - 新羅・渤海の対藩鎮交渉 -

筆者はフェローシップのテーマに、新羅・渤海が唐の藩鎮へ送った使節の研究を選んだ。藩鎮とは当時軍事・行政権を担い、軍閥組織として唐王朝から半ば独立した共同体である。藩鎮との交渉は、王朝間外交とは違うものの、王朝がある地域の共同体に送ったという意味で外交に似た性格を持つ。そのため新羅・渤海の対藩鎮交渉の研究は、その実態を解明する点で有意義だけでなく、当時の外交とは何かを考えるうえでも重要である。

フェローシップのおかげで韓国に滞在して研究に専念することができた。滞在中はソウル大学を拠点に、藩鎮との交流を示す資料の分析を行った。これは現在執筆中の論文で反映させる予定である。以下研究内容の一部を紹介したい。



唐の藩鎮一覽（『世界歴史体系 中国史2』山川出版社より）
新羅・渤海は海岸沿いの諸藩鎮と交渉した。

日韓の遣唐使研究と東アジア

遣唐使といえ、多くの読者が日本から唐へ送った外交使節を

思い浮かべるだろう。それだけ遣唐使という言葉には、日本を起点に送った外交使節という根強い認識がある。一方、1990年代以降韓国でも‘遣唐使’の研究が活発になってきた。ここでいう遣唐使とは、新羅・渤海など朝鮮半島から唐へ送られた外交使節である。

朝鮮半島から派遣された遣唐使の研究が盛んになったのは、東アジアの中で韓国古代史を読み直す試みが行われるようになったからである。遣唐使研究が活発になった要因の1つに2002年から中国で始まった東北工程がある。中国は、高句麗史など従来韓国史の一部として書かれていた内容を、自国史の中に位置付けようとした。この東北工程に対し、韓国では東北アジア歴史財団を発足させ、東アジアの中で新羅・渤海などの主体性を引き出すとする研究成果を続々と発表していった。^{*}

一方、日本でも東アジアの中で日本の遣唐使・遣唐留学生を捉える研究が重視されてきた。近年は日本の古代史学界の一部で、東部ユーラシアまで視野を拡げて歴史を読み直す視点が提唱された。従来の日中韓を示していた政治性の強い‘東アジア’という枠組を越えようという試みである。その結果、日本の遣唐使を新羅・渤海の遣唐使と比較する研究成果も少しずつみられるようになった。

中国の外部である日本、新羅、渤海という王朝に主体性を置き遣唐使を理解する立場は両国とも変わらない。そしてそこには中国の外部を起点にして、唐との外交を捉えようとする日韓両国共通のまなざしがある。しかし、日韓両国の設定した東部ユーラシア、東アジアという対象空間の範囲は異なる。現代の日韓の研究者が見ている古代の東アジア像に違いがあるからである。



崔致遠の著した『桂管筆耕集』の一部。彼も880年頃淮南藩鎮の下で職に就いており、新羅と藩鎮の交流の一端を担っていた。

日本・新羅・渤海の唐へのまなざし

では古代の日本人と、新羅・渤海人が見ている唐を比較したとき、どのような違いがあるだろうか。日本では‘遣唐使’や‘入唐使’など、派遣対象を唐王朝とする用語のみが史料にあらわれる。この‘入+目的地名+使’という用法は、東アジアの同時代史料に広く見られるものである。たとえば唐の史料では、吐蕃に向かう使節には‘入吐蕃使’と記録される。

これに対して朝鮮半島の金石資料や崔致遠が記録した『桂苑筆耕集』には、9世紀唐に向かった使節のうち‘入淮南使’や‘入浙使’などの表記がみられる。派遣対象を唐の王朝ではなく東シナ海沿岸の淮南や浙江の地域にしているのである。この地域は、当時藩鎮が管理しており、新羅・渤海は藩鎮に使節を派遣していたことがわかる。つまり古代朝鮮半島では、唐に向かう使節といっても一概に王朝を示すわけではない。日本と新羅・渤海では唐に向けられたまなざしの対象が違うのである。では、具体的に新羅・渤海の対藩鎮交渉が生まれた契機と交渉の実態を見てみよう。

対藩鎮交渉の契機と実態

755年、范陽（現在の北京）で安祿山が唐王朝に対して反乱を起こした。安史の乱とよばれるこの内乱は、安祿山の部下である史思明の反乱を誘発し763年まで続いた。当時唐の皇帝であった玄宗は、長安の都を捨て蜀（現在の四川省）へと避難するほどであったという。この反乱は唐の国力を疲弊させる原因になった。唐各地の藩鎮は、弱体化した唐に対してたびたび反乱を起こし、独立の性格を色濃く表すようになっていった。

新羅・渤海は唐が弱体化しても親唐的姿勢を貫いた。安史の乱の際、新羅は蜀へ避難していた皇帝へと使節を送っている。その後も新羅は藩鎮の反乱地域を避け、東シナ海沿岸沿いにある藩鎮を経由して長安へと向かった。また渤海の対藩鎮交渉でも、安史の乱が契機となった。安史の乱の際に藩鎮は、援軍要請の使節を渤海へ向けて送っている。両国の対藩鎮交渉の契機は唐の内乱にあった。

戦乱から生まれた新羅・渤海と藩鎮の交渉では、文物交流も行われた。834年興徳王は、貴族に対して、瑟瑟^{シツシツ}を装飾に使った櫛の使用を禁じている。瑟瑟は、一説にはエメラルドともいわれる碧色の玉である。サマルカンドやペルシアを原産地とし、唐では産出されない。東シナ海沿岸の諸藩鎮がペルシア商人と交易を行っていたことを考えれば、当時新羅がこれらの諸藩鎮と交渉して手に入れたものであろう。また、渤海も現在の河北・遼寧省一帯を支配した幽州藩鎮、山東半島一帯を支配した平盧藩鎮と文

物交流を行った。なかでも渤海の交易品には馬がみられる。渤海の馬は率賓（綏芬河流域）で産出され、唐の人々にも知られた名馬であった。これらの馬は唐の戦乱に利用されたのであろう。

新羅・渤海と藩鎮との交流で交換されたものには、エメラルドや馬の例にみられるように奢侈品や軍事物資などが多い。奢侈品や軍事物資は、流通すると王朝内部の政治問題に繋がる可能性があるため、王朝の統制を受けやすい。新羅・渤海と藩鎮の交流はきわめて政治的な性格をもつものであった。

対藩鎮交渉は外交か？

ただし新羅・渤海と藩鎮の間で行われた交渉は、唐王朝との外交で行われた朝貢とは別の形態をとっていた。中国では新羅と藩鎮の交流を‘通和’と理解し、渤海が藩鎮に使節を送ったことについて‘聘問’や‘来聘’という表記を採用している。このような表現からは朝貢の持つ上下関係を見出すことができない。新羅・渤海の対藩鎮交渉を外交の一部と考えられるかは、今後更なる検討が必要であろう。

確かに藩鎮との交渉の契機は、内乱による藩鎮との通交にあったため、その起源を外交と見る余地はある。だがそもそも古代外交の定義がきわめて近現代的なのである。なぜなら、現在使われている王朝間外交という概念自体が、近代以降の産物に過ぎないからである。古代社会の王朝間交渉のみを外交と把握したのは近代の人々のまなざしの副産物である。

それゆえ古代の外交研究では、朝貢関係で示される王朝間交渉以外の形態に注意を払っていない。しかし、新羅・渤海の立場から唐を眺めると、唐内部の藩鎮といわれる共同体とも交渉を行ったことが見えてくる。当時の彼らのまなざしと対象を理解していく作業は、日本から見る東部ユーラシア、韓国から見る東アジアを考える際にも重要であろう。

※東北工程の事情については以下の論考に詳しい。古畑徹、2010「歴史の争奪—中韓高句麗歴史論争を例に—」『メトロポリタン史学』6

ソウル大学校人文大学国史学科

こみやひでたか
小宮秀陵

2010年ソウル大学人文大学国史学科博士課程修了。2012年に訪韓フェローとしてソウル大学人文大学国史学科に滞在して研究を行う。専門は古代東アジア諸国の国際関係史。

PROFILE

『石の上にも三年』というが、通訳という仕事を始めてから、いつの間にか30年にもなってしまった。それは偶然にも日韓文化交流基金が設立された年と重なり、改めて長い年月が過ぎたのだと感慨を覚えざるを得ない。最初は通訳というもおこがましいまったくの素人で、韓国語が出来るというだけで関わり始めたが、ここまで続けてこられた幸運に感謝するばかりである。当時は訪問先で韓国語を話せる日本人など居る訳もなく、エスコート業務のはずが実際には専門分野の通訳をせざるを得ない場面に何度も遭遇した。まだ語彙力も少なく頭の中は真っ白という事もしばしばだった。また、韓国からの訪問者も海外経験の少ない破天荒な人が多く、何を言い出すか予想もつかず、日々、ドタバタと驚きの連続であった。今から思うと顔から火が出るような失敗や、呆気にとられるような出来事が山ほどあったが、生来の能天気さで、無知を無恥で乗り切ってしまったようだ。



1999年 大阪城にて、韓国教員と。同じ働く女性としてすぐに友達に。(中央が著者)

通訳とはおかしな職業である。一日中会議場に座っているかと思えばヘルメットをかぶって山の中にも出かける。そうかと思えば、政財界の大物や著名な文化人と行動を共にし、食事やお茶も一緒にする。どんな分野にもどんな人にも合わせるカメレオンのようだ。

それに比べ、交流の仕事は自分の個性や主体性を前面に出せるようで、とても楽しく、やりがいも大きい。交流はお祭りのようないわばハレの日である。非日常を離れて言葉の通じない外国人と時と場所を同じくして心を通わせる。その高揚感と喜びが、一挙にそれまでの先入観を変えてしまう事を何回も目の当たりにしてきた。初めてホームステイを受け入れた寡黙そうな男性が別れの場で目を真っ赤にして涙をこらえていた姿や、一生の別離とばかりに抱き合って大泣きしていた日韓の女子高生たちの姿は今でも脳裏に焼きついている。

確かに2002年のワールドカップ共催、韓国ドラマの大ブレー



2011年 韓国高校生と。若い人からはいつも元気をもらいます。

ク以前は、日韓は「近くて遠い国を、近くて近い国にしましょう」という陳腐ともいえる常套句の挨拶がびったりの間柄であった。相手に対する無理解や偏見が、交流の場においても一瞬即発の事態を生み出すことを何度も経験した。それだけに、青少年の交流事業の必然性があり、その成果も大きいことを肌で感じてきた。

その後の韓流ブーム、特に中年女性達の情熱は日韓の距離を一挙に縮めたといえる。一方、インターネットが発達し、情報が大量にそして一瞬にして多くの人に伝わる。最近の韓国の若者達は昔では想像できないほど、日本についての知識を持って来る。渋谷のどの店がおいしいかの、原宿のどの店に可愛いものが売っているかの、まるで日本の子ども達を見ているようだ。

韓流ブームなどによって日韓の往来者数が飛躍的に増え、もう公的な交流事業は必要無いのではと思うほどであった。しかし、いくら交流の仕事でプロと自負していても、いつ地雷を踏むかわからない。政治や歴史問題などで一朝にして悪感情むき出しの事態に陥ってしまう事もしばしばだ。時には交流がどれだけ役に立つのかと虚しさを感じる時さえもある。

そんな風に落ち込んだときの特効薬は、参加者たちの「ありがとう」の一言だ。「日本に対する見方が変わりました」「日本人が好きになりました」「また、日本に来たいです」、これらの言葉を聞くたびに、人と人が直接会って話す事の重要性を痛感する。これはいつの時代も変わらない基本であり、このような心と心をつなぐ交流の場を絶やしてはいけないと思う。これからも石の上に花が咲くまで、心の種を蒔き続けていきたいと思う。



2013年 韓国大学生から心のこもったプレゼントをもらう。

うし おけい こ
牛尾恵子

PROFILE

- 1949年 ソウル生まれ
- 1972年 西江大学校韓国語韓国文学科卒業
- 1974年 東京デザイナー学院インテリアデザイン科卒業
- 2010年 NPO法人日中韓から世界へ設立 代表理事

2歳のとき来日、その後、高校と大学は韓国で過ごし、日本に戻る。1983年からフリーランスとして通訳の仕事を始め、主に政府、公的機関の仕事に従事し、現在に至る。著書に『日常会話韓国語』(ダイソー)『トラベル韓国語会話』(ダイソー)『家族海峡』(共著、自費出版)がある。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2013年度第1四半期(2013年4月1日から6月30日まで)の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生 (在韓公館選抜)	宋浣範 (ソン・ワンボム) 高麗大学校日本研究センター教授	32	8	24	3/28 ~ 4/6	長野市
韓国高校生 (在韓公館選抜)	徐商範 (ソ・サンボム) 太白機械工業高等学校教師	33	12	21	4/10 ~ 4/16	郁文館高等学校
韓国教員 (第1団)	韓哲洙 (ハン・チョルス) ソウル永文初等学校校長	20	9	11	5/14 ~ 5/23	江東区立有明小学校 東京都教育相談センター 一宮市立三条小学校
韓国教員 (第2団)	宋秉一 (ソン・ビョンイル) 上炭初等学校校長	20	11	9	5/14 ~ 5/23	中央区立中央小学校・明正小学校 東京都教育相談センター さいたま市立常盤北小学校

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
韓国中学生 (第1団)	鄭上鉉 (チョン・サンヒョン) 東馬中学校校長	50	20	25	5/23 ~ 5/29	栃木県立佐野高等学校・同附属中学校
韓国中学生 (第2団)	金寛洙 (キム・グァンス) 富平女子高等学校校長	49	13	31	5/23 ~ 5/29	日光市立豊岡中学校
韓国中学生 (第3団)	鄭貞徳 (チョン・ジョンヘ) 崇谷中学校校長	50	19	26	6/13 ~ 6/19	宇都宮市立陽北中学校
韓国中学生 (第4団)	朴美吟 (パク・ミリョン) 凍港中学校校長	50	17	28	6/13 ~ 6/19	上三川町立本郷中学校

*1引率含む *2生徒のみ

2 理事会及び定時評議員会のご報告

6月6日に第57回理事会、6月24日に平成25年度定時評議員会が開催され、平成24年度事業報告及び財務諸表等報告が承認されました。

3 賛助会員

2013年4月1日～6月30日の期間に、個人会員4名の方に賛助会員制度にご加入いただき、4万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略。)

個人

荻野綱男 生越直樹 林史樹 堀泰三



【韓国教員訪日研修団】東京都教育相談センター



【韓国中学生訪日研修団】佐野高校附属中学校で華道体験

業務執行理事 兼 事務局長就任の御挨拶



余田幸夫

去る3月末に40年間勤務した外務省を退き、6月から「日韓文化交流基金」で阿部孝哉業務執行理事・事務局長の後任として同ポストに就任しました余田幸夫(よでんゆきお)と申します。海外勤務(韓・米・中)のうち韓国ではソウル、釜山、済州の3公館で計17年間務め、その時々の変化・発展を具に眺めつつ、また韓流をはじめとする日韓文化交流の進展振りについても肌で感じてまいりました。

公益財団法人「日韓文化交流基金」は、日韓関係が政治的にギクシャクすることがあっても、文化交流を通じて両国関係を下支えするとの趣旨で1983年に設立された団体です。今日のような状況であればこそ、なおさら当基金の青少年交流、有識者会議、フェローシップ、助成事業等を積極的に推進していくことが肝要と思っています。幸い、当基金の相互交流事業は昨今の政治環境に左右されることなく、引き続き実施されています。

今日の情報化社会では、容易に外国の事情・知識を得ることができます。しかし同時に、隣接する日韓間においても様々な情報が錯綜し、不確かな情報で相手国や国民を誤解したり、また偏った先入観で勝手な解釈をすることになれば、これはお互いにとって不幸なことです。それだけに自らが直接訪問し、事実を確認し、考えることが大切だと思います。

当基金で優先的に青少年交流や研究者等の相互交流を実施しているのも、相手の歴史・文化・社会生活等のありのままの姿を体感し、率直な意見交換、ホームステイ等を通じて一人一人が直接向き合って心を通わせ、その体験を共有し、さらにその友情の輪を広げて双方の信頼関係を深化させたいと願っているからです。勿論、若い世代のみならず世代を超えた日韓間の各分野で相互理解増進のために鋭意取り組んでおられる皆様の御努力に対してしっかり応えられるよう、微力ではありますが、今までの経験を活かしながら最善を尽くして参りたいと念じております。

今年12月に当基金は丁度創立30周年を迎えます。諸先輩が積み上げてこられた交流実績とその成果を基に、今後とも皆様の御支援、御協力を賜りながら、新たな気持ちで時代の変化に見合った事業に取り組んで参りたいと考えております。引き続き御指導のほど宜しくお願い申し上げます、新任の御挨拶に代えさせていただきます。

公募プログラム フェローシップ・助成のご案内

フェローシップおよび人物交流助成の募集要項・申請書は当基金
ウェブサイト<http://www.jkcf.or.jp>からダウンロードできます。

2014年度 招聘・派遣フェローシップ

フェローシップは日韓両国の優れた研究者を派遣・招聘し、調査・研究などの活動を行う機会を提供するとともに、特に次世代を担う中堅・若手世代の研究者の相手国における滞在研究を支援する制度です。2014年度分の募集期間は2013年10月1日から10月31日までです。

	招聘フェローシップ（訪日）		派遣フェローシップ （訪韓）
	短期コース	長期コース	
期間	1ヶ月～3ヶ月	3ヶ月を超え11ヶ月	1ヶ月～11ヶ月
年齢*1	満30歳以上	満30歳以上50歳以下	満30歳以上50歳以下
支給額*2	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円 研究費月額 120,000円 渡航費 実費支給	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円 研究費月額 120,000円 渡航費 実費支給 到着手当 65,000円 帰国手当 64,000円	滞在費月額 A.180,000円 B.210,000円 C.240,000円 研究費月額 70,000円 渡航費 実費支給
書類送付先	ソウル日本大使館公報文化院、釜山総領事館、済州総領事館		日韓文化交流基金

*1 2014年4月1日現在の年齢

*2 滞在費月額は基金の基準により、申請者の研究歴などに応じて決定されます。
滞在費の支給額は当該月の相手国での滞在日数により増減します。

2014年度 人物交流助成

人物交流助成は日韓が共同で開催する草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流の各種事業を支援し、日韓の交流をより活性化・多様化させ、両国の友好・交流関係を深めることを目的としています。

草の根交流

一般市民による日韓相互理解のためのプログラム

シンポジウム・国際会議

日韓両国の文化や日韓関係など、両国に関わる人文社会科学分野のテーマを扱うシンポジウム・国際会議

芸術交流

専門家による公演・展示・共同制作など、芸術分野における交流を目的とする各種の文化事業

2014年度(2014年4月～2015年3月)実施事業に対する人物交流助成の申請を、
2014年1月6日から1月24日まで受け付けます(募集は年1回です)。